

〈特別研究課題〉 景観資源の発掘と評価における画像情報の役割に
関する研究

助成研究者 愛知県立芸術大学 水津 功



景観資源の発掘と評価における画像情報の役割に関する研究

水津 功
(愛知県立芸術大学)

Research on role of image information in excavation of landscape resource and evaluation

Isao Suizu
(Aichi Prefectural University of Fine Arts and Music)

Abstract:

It is necessary to clarify the following two so that the person in charge of the landscape administration may execute a policy. It is "How is the landscape resource discovered?" and "What standard evaluates the landscape resource?" Importance in the idea of these is "Methodology of the dialogue" Because it is a local populace that finally evaluates the landscape. This research tries to point out that photograph (picture) is useful for the achievement of the dialogue with the harvest.

キーワード：景観行政、景観資源、デザイン手法、航空写真、スナップショット、パノラマ、全方位画像

1. はじめに（研究目的）

私は、景観に場所ごとの固有性があると言う時、その土地に備わった自然的要因もさることながら、その場所の住人が持ち続けてきた「知覚・態度・価値」という人的要因が重要だと考えている。景観をものの研究として扱うことは、事実の1側面しか見ていないに等しい。何故なら、景観を最終的に評価し、淘汰し、支えるのはそこに住まう人間だからである。従って、景観行政は、ものの整備を考える前に、景観に関する住民意識の形成に取り組まねばならない。次の章「2. 景観行政の現状」では、景観行政の現状について、アンケート調査を基に考察した。「3. 写真」では、写真が持つ3つの視野の特徴を整理し、景観資源の発掘とその評価の過程における役割についての仮説を立てた。「4. 碧南市での実験」は、地域住民との対話の中から景観資源を発掘する試みを行いながら、写真のもたらす効果や役割を確認した。その結果を「5. まとめ」で一覧表にした。

2. 景観行政の現状

平成18年7月に、愛知県碧南市都市計画課と合同で、景観に関する2つのアンケート調査を実施した。Aアンケートは、様々な事情を抱える地方行政が景観をどのように捉えているかを探るため、愛知県内の61の市町村（政令都市および碧南市を除くすべて）に対して実施。Bアンケートは、既に景観行政団体になった自治体の意識の実態がどうかを探る目的で実施した。表1はアンケート全体の概要、表2は記述回答の部分の内訳である。愛知県において「景観政策を考えている」と答えた自治体は20件、全体の3割強であった。その中で景観行政団体になる予定があると答えた自治体はさらにその3割の6件、全体の1割であった。逆に「景観政策を考えている」と答えながらも景観行政団体になる予定はないと答えた理由を表2. A-3に見てみる。(4)の「資金、人員確保がないから」は、景観行政に関する解釈が原因ではないからこの際無視する。(3)の「もう少し様子を見たい」は、必要性を認めながらも具体的な手法が明確でないための躊躇のようだ。(1)の「景観資源がないからである」は、景観を何か特別なもの、場所によって在ったり無かったりするものだと解釈しているようである。このような捉え方の傾向は、実は景観行政団体になった理由（表2. B-1）からも読み取ることができる。一方、表2. A-5（2）や表2. B-1（4）のように、これまでのまちづくりの手法を見直そうという考えもあることや、表2. B-3（4）のように、景観計画よりも景観地区の指定の方が先に行われるべきといった、上位概念から決定してゆく従来の行政行政の流れに違和感

表1 景観行政に関するアンケートの概要

質問	選択肢及び回答方法	結果
A-1 景観政策を考えているか？	考えている	20
	考えていない	26
	わからない	12
A-2 景観行政団体になる予定があるか	ある	6
	ない	20
A-3 問2で「ない」と答えた場合の理由は何にか	記述	別表
A-4 景観計画の予定はあるか	ある	5
	ない	9
A-5 4で「ない」と答えた場合の理由は何にか	記述	別表
A-6 ソフト政策(表彰制度、セミナー、その他)について	—	(省略)
A-7 景観に関するアイデアやアドバイス	記述	(省略)
A-8 景観活動団体の有無	ある	11
	ない	47
A-9 景観活動団体の主体(商工会議所等の団体、NPO、その他)は何か	団体名	(省略)

Aアンケート(愛知県内の政令都市と実施当該市である碧南市を除く61市町村を対象)の概要

質問	選択肢	結果
B-1 景観政策団体になった理由はなにか	記述	別表
B-2 景観計画の策定予定があるか	ある	89
	ない	5
B-3 2で「ない」と答えた場合の理由は何にか	記述	別表
B-4 ソフト政策(表彰制度、セミナー、その他)について	—	(省略)
B-5 景観に関するアイデアやアドバイス	記述	(省略)
B-6 景観活動団体の有無	ある	55
	ない	39
B-7 景観活動団体の主体(商工会議所等の団体、NPO、その他)は何か	団体名	(省略)
B-8 団体との連携に関するアドバイス	記述	(省略)

Bアンケート(全国の景観行政団体登録をした123の市町村を対象)の概要

表2 景観行政に関するアンケート記述回答部分

景観行政団体になる予定はないと答えた自治体		22
A-3 その理由	(1)景観資源が少ないから、課題がないから	5
	(2)景観資源が豊かにあるから	1
	(3)もう少し様子をみたいから、慎重に検討したいから	7
	(4)資金、人員などの体制が整っていないから	7
	(5)景観に対する意識を熟成させる必要があるから	1
景観計画の策定予定がないと答えた自治体数		9
A-5 その理由	(1)既存の計画で間に合うから	2
	(2)既存の計画を見直すから	1
	(3)市民の意識がまだ低いから	2
	(4)方針が決まっていないから	2
	(5)予算措置が未定だから	1

Aアンケートの記述回答部分の分析

景観行政団体になった自治体(市町村)数		123
B-1 景観行政団体になった理由	(1)上部組織(主に県)の意向があったから	10
	(2)危険にさらされている景観資源を守りたいから	7
	(3)テーマ性のあるまちづくりを行いたいから	6
	(3)すでに始めている政策(条例や基本計画など)をより推進させる拘束力が必要だから	26
	(4)すでに始めている政策(条例や基本計画など)を、見直す好機だと思うから	6
	(5)きっかけになる事件、問題等が発生しており、拘束力のある対応が急務だと感じられるから	5
	(6)既存の景観資源を活かした良好な景観形成を主体的に行いたいから	33
	(7)景観計画を必要とする大規模計画があるから	1
景観計画の策定予定がないと答えた自治体数		5
B-3 その理由	(1)既存の政策との調整中だから	2
	(2)合併等により統一的なイメージが固まっていないから	1
	(3)まだ組織を立ち上げていないから	1
	(4)景観計画よりも景観地区の指定が先だと思うから	1

Bアンケートの記述回答部分の分析

を感じている意見も出ている。しかし、それらはごく少数意見である。研究者はこの少数意見に賛同するものであるが、少なくとも景観行政団体になった自治体の大半は、従来の方法で政策を進めようとしているようだ。重要なのは、「どうやって景観資源を発掘するのか?」ということと、「発掘した資源をどうやって評価するのか?」という点である。このことの重大さに気付いた自治体は、躊躇し、慎重になり、今までのやり方を見直さざるを得ないであろう。このような景観行政の現状に対し、この研究は、景観資源の発掘において地域住民との「対話の仕方」に注目し、写真を使った方法論(写真を用いた市民との対話から生まれた景観意識が、共有され、持続的な影響力を発揮し、地域住民が景観形成の当事者になる為の手助け)を試みようとしている。

3. 写真

毎日の生活の中で見慣れているものの中に「本当は大事なもの」を発見することは難しい。大抵は失って初めてその重要性に気付くのである。訓練されていない一般市民が自分の日常風景にそのような客観的な視線を持ち込むためには、何らかの中間媒体が必要であると考ええる。写真は対象を視覚的には限定しながら、その解釈は限定しないという点において、中間媒体として優れた性質を有していると言える。ここでは、景観行政において写真の3の属性「航空写真」「スナップショット」「パノラマ写真および全方位写真」がどのような意味を持ちえるかについて考えてみたい。

3.1 航空写真：神の目／直交座標系視野

航空写真は、人が日常的に接する視覚経験を超越している。空から地上にあるものすべてを等しく見渡す目とはすなわち神の目あるいは科学の目であろう。どの地点に対しても平等性を保つという点では公共的な目とも言えるかもしれない。地図との決定的な違いは、細部を省略しないという事である。細部の多さ＝情報量の多さは、それだけ、多様な地域住民の経験をより多く引き出す可能性を持っていると言える。景観に関する地域住民との対話の中でこの写真の果たす役割として考えられることは、(1) 自分の知っている環境を全く別の見方で見ることで、好奇心を刺激し、知っている場所を探してみたいくなるようなゲーム性がある。記憶を呼び覚ます間接的なトリガーになること。(2) 自分や他人の経験が、同じ画面上に配置される。対話の中に共感や補完が促される。(3) 個人の経験という主観的な事実と、地形や、家屋の密集具合や、緑地の分布状態といった、客観的な事実との関係性を見出しやすい。自分の経験に新しい説明が加わる。(4) 航空写真自体は特定の個人や考えを想起させるような誘導をしないので、対話のごく初期に用いると効果的なのではないか、などである。



図1 2枚の航空写真が碧南市棚尾地区の30年の変化を視覚化する（左が1969年、右が1999年）

3.2 スナップショット：人の目／極座標系視野／単人称パースペクティブ

ここで言うスナップショットとは、ごく一般的なカメラを用いて撮影された写真のほとんどを指している。人が日常的に接する視覚経験に近いものである。撮影者は自分も含めた環境の全体から任意の部分を他の部分から区別し、切り取る。切り取る際に、画面内での対象の配置や奥行きなどの構成を意識し、特定の見方や、印象の与え方をコントロールしようとする。たいていの場合、1枚のスナップショットから、ここを見てほしいといった構図上の中心やテーマ性をあた

かも絵画のように感じ取ることができる。スナップショットは極めて主観的なパースペクティブであり、撮影者自身と対象との関わりが表現されている。スナップショットの重要性は、対象の美的再構築にあるのではなく、撮影者の経験を象徴している事だと理解すべきである。18世紀末、イギリスでは、景観を絵画的な美的規範によって評価しようとする「ピクチャレスク」と呼ばれる運動が起こり、新聞で論争が巻き起こるほど国民的関心事になった。ピクチャレスクはその難解な理論を広く国民に主張するにあたって、景観をよりよくするとはどういうことかを具体的に示すために、言葉や図面ではなく、2枚の絵画、つまり使用前使用後のスケッチ＝スナップショットを用いて価値の低い景観が価値の高い景観に改善される様子を現そうとした。ピクチャレスク自体は、やがて支持を失っていったが、より多くの人々の関心や共感を得ようとしたこのような手法は現代においても有用であろうと思われる。景観に関する地域住民との対話の中でこの写真の果たす役割として考えられることは、(1) 地域住民の主観的経験に最も近い視覚が得られること。(2) 誰しも自宅の古いアルバムには、整理されていない相当な数の写真があるもので、これらの中に景観資源を発見できる可能性があること、(3) 地域住民自ら撮影することが容易であること。(4) 同じ対象に対して、10人の人は10通りの見方をするであろう。しかし、それらは全く違うのではなくて、どこかが少しずつ違い、どこかが少しずつ共通しているのではないということ。そのような繊細な差異がスナップショットには現れてくる。それほどまでに我々の眼はこの視野に熟練しているのである。



図2 このような写真は、何か物語を感じさせる。スナップショットは強力な絵画的、文学的な訴求力を持っている。
右：昭和初期の応仁寺境内、老松、佇む人（撮影：原田氏）
左：この緑のゲートを越えると西端地区の旧集落に入る（撮影：水津）

3.3 パノラマ写真および全方位画像：超人の目／極座標系視野／複数のパースペクティブ

パノラマ写真及び全方位写真は極座標系の視野であり、横に長いスナップショットとは異なるものである。まず、目や身体を動かさなければ捕らえることができないような視野角をカバーしていることが特徴である。つまり、1枚のパノラマ写真は、複数のスナップショットが合成された複合視野なのである。スナップショットがそれぞれ独立した視構造、1つの焦点を持った物語であるとするならば、パノラマ写真は、複数の焦点、複数の物語を同一画面上に包括する。日本の絵巻や屏風絵「洛中洛外図」に似た視覚構造を持っていると言える。全方位写真は、完全な全

周囲360度をカバーしたパノラマ写真のことである。以下、パノラマ写真はこの全方位写真の事として論を進める。全方位写真を作成する方法はいくつか考えられるが、目的、難易度、手間によって適切なものが選択されるべきで、最終的に地域住民が作成可能であることを念頭に、表3のように整理してみた。これ以外にも全方位画像機器はあるが専門家向きなのでここでは扱わないものとした。

表3 全方位写真の制作手法の比較

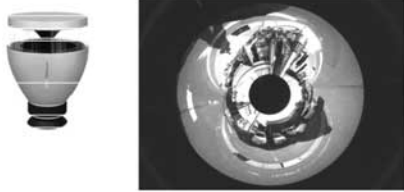
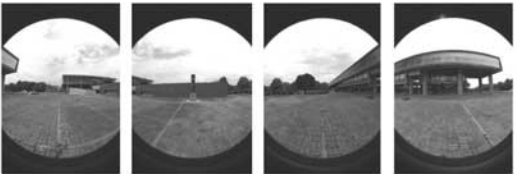
番号	レンズタイプ	レンズ製品名	使用カメラ	撮影回数	撮影画像	処理	大型プリント	VR機能	評価
1	曲面ミラー（反射）式	EGG360	NIKON COOLPIX5000	1		自動展開（専用ソフト）	×	○	価格は10万円以上と、市民が気軽に利用するにはやや高価。大きさは、コンパクトデジカメを使用する前提の場合、相対的にミラー本体が大きいので機動性に欠く。画像の解像度があまり高くないが、簡単にシームレスな全方位画像とVRが作れる。撮影時に水平器付三脚が必要。
2	専用レンズ（屈折）式	PAL-S50-1228	NIKON COOLPIX5000	1		自動展開（専用ソフト）	×	○	価格、大きさは市販のコンパクトデジカメ用コンバーターレンズ並み。レンズ本体が小さく機動性はある。画像の解像度があまり高くないが、簡単にシームレスな全方位画像とVRが作れる。撮影時に水平器付三脚が必要。
3	普通レンズ	COOLPIX5000標準固定	NIKON COOLPIX5000	7510		手動つなぎ	○	×	特別な装備は不要で水平方向に回転しながらシャッターを押すだけである。カメラの解像度次第で大型プリントにも耐える。欠点は撮影枚数が多くなるのと、画像の連結が手動で、つなぎ目がスムーズに行かないことである。時間をかければ特別な技術は不要。撮影時に、カットごとの露出差による違和感を軽減する調整が必要。
4	1眼レフ用魚眼レンズ	SIGMA 8mm F3.5 EX DG fisheye	NIKON D200	4		自動つなぎ（別途ソフト）	○	○	装備は比較中最も大掛かりで高額。高解像度を必要とする大型プリントに耐える。撮影枚数は4枚で、水平器付三脚と、回転角度を測れる雲台、回転の中心をレンズの焦点と一致させるための調整具が必要。画像の連結、VR変換には別途、専用ソフトが必要。実験はeasypano社製Panoweaverを使用。つなぎは全て自動で行われる。VRの解像度も高い。利用範囲が広いので資料性も高い。

表3の4の方法は、カメラ、レンズ、三脚は汎用のものなので、一般の方でも、専用の雲台と、ソフトが入手できれば、制作は十分可能である。以下（図3）に、このシステムで撮影した全方位写真を用いて、パノラマ写真とスナップショットの関係を見てみる。デジカメ1眼レフカメラに魚眼レンズを装着、水平器付き三脚とパノラマ用雲台を使って正確に90度回転させながら4カット撮影した。4枚の画像を繋ぐためには専用ソフトを用いる。合成した画像は手前も奥も鮮明で高品質な全方位写真が得られた。カット間の露出差による明るさの違いは撮影時と撮影後に調整できる。図3の上段、左から2番目のカットは他の画面と比べて明るい。もう少し調整して両隣にフィッティングする必要がある。専用ソフトにVRを作成する機能があれば、やや解像度が落ちるものの、臨場感のあるインタラクティブなムービーが作れる。

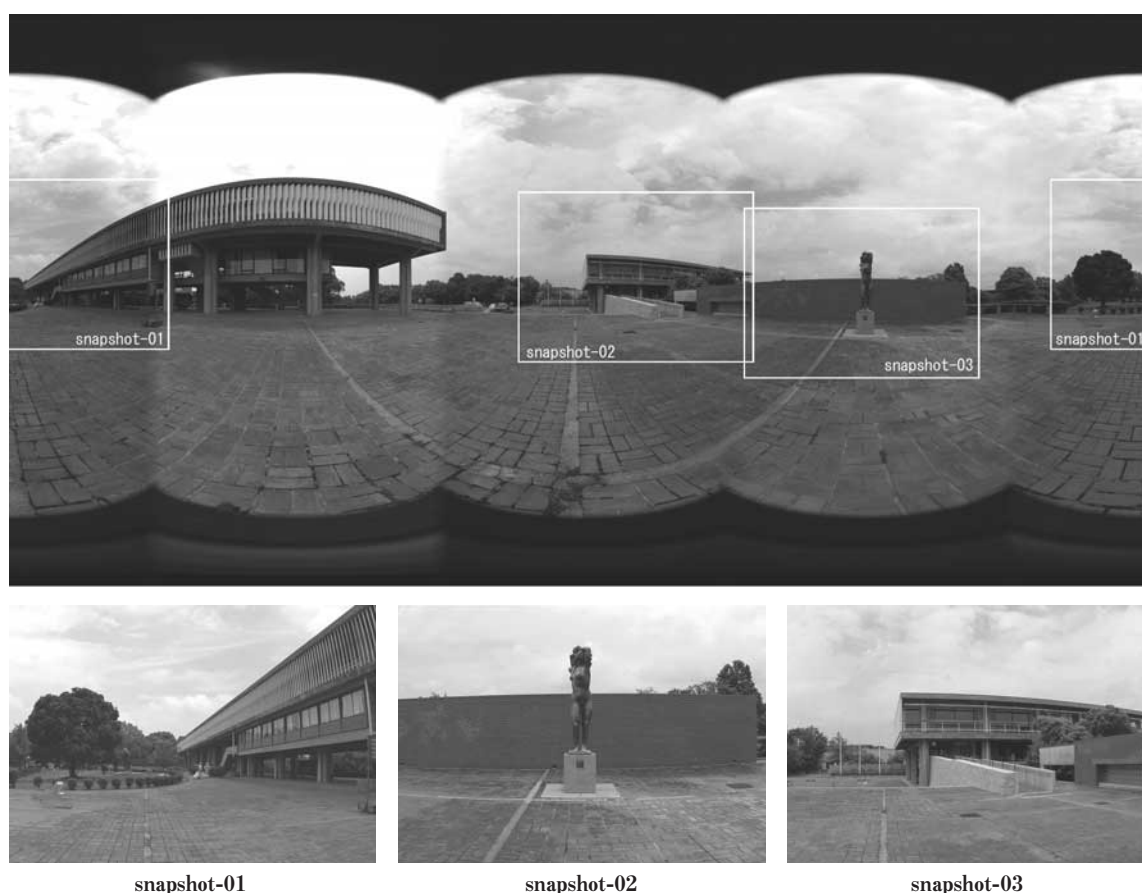


図3 全方位写真とスナップショットの関係

景観に関する地域住民との対話の中でこの写真の果たす役割として考えられることは、(1) 見慣れない視覚の中に見慣れたシーンを発見してゆく面白さがあり、間接的なトリガーになりうる (2) 図3の下段にあるように、3枚の異なるスナップショットが実は同じ場所から撮影したものと判ること等、シーン同士の関係性を示すことができる。(3) 臨場感の高いVR出力によって、地域住民の経験により接近した視覚を提供できる (4) 複数の視点を持ち込めるため、ディスカッションしながら書き込みができる、等である。

4. 碧南市での実験

ここでは、前章までの仮説を、碧南市の景観資源発掘を行う中で確認してゆく。碧南市は愛知県の南部三河湾に面し、戦後臨海工業で栄えた人口7万の地方都市である。市域全体は碧海台地と矢作川沖積地からなる10m以下の平坦地で、集客力の期待できる観光資源はほとんどないが、臨海工業の税収で財政が豊かなので、景観を経済効果で説明する必要がない。まさに市民の日常生活の為に景観行政を行うべきごく普通の地方都市である。現在の陸地の半分以上が約400年前には海で、碧南市を構成している6地区の基になっている古い集落は、もともと陸地だった部分に集中している。今回、実験を行ったのは西端地区と棚尾地区の2地区についてである。



図4 約400年前の碧南市

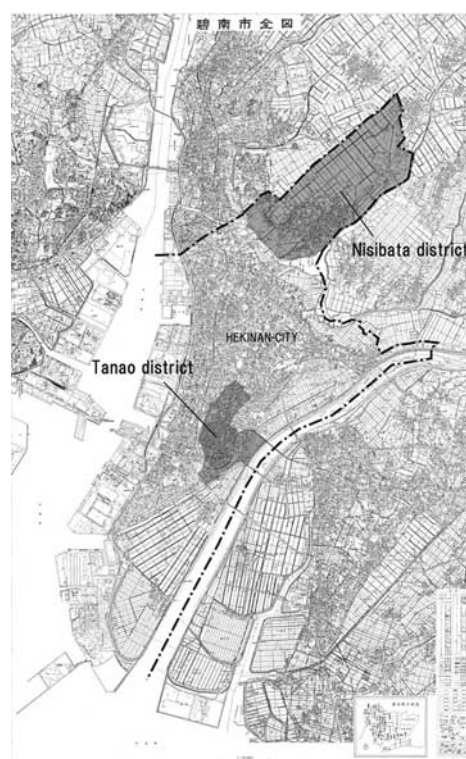


図5 碧南市全図と実験を行った2地区

4.1 西端地区

(1) 写真を用いた対話から景観資源の発掘する実験(1回目) 2005年11月13日(日)

発掘調査に参加していただいた地域住民の方々は、以前に市が主催した景観ワークショップに参加したメンバーである。まず、趣旨説明をした後に、対象とする地区域を含んだ2枚の航空写真(昭和44年、平成11年撮影)と、白地図(縮尺五百分の一)を囲んで、参加者に、まずは自己紹介という形で自分の住んでいる家と主な行動範囲を示しながら話を始めてもらった。最初のうちは、何を話せばいいのかわからない様子だったので、研究者側から、航空写真を見ながら、この集落の民家はどれも規模が大きいこと、中庭を中心とした口の字形であること、平坦といいながらも特徴のある微地形が生む坂や切通し、わずかな斜面地に沿って連続的な緑地があることなどを指摘した。また、同行した碧南市都市計画課の職員からもきっかけに

なる話が出た。徐々にリラックスし、様々な場所にまつわるエピソードが出てきたので、それらを地図上に記録していった。まとめとして、午後どのルートを歩くべきか話し合った。午後は、ルートを辿りながら、場所毎に思い出されるエピソードを記録していった。また、エピソードを記録した場所のスナップショットを撮影した。



図6 はじめは航空写真と白地図から



図7 昭和44年の西端地区集落の航空写真



図8 現地で場所のエピソードを取材する

(2) 写真を用いた対話から景観資源の発掘する実験(2回目) 2005年12月11日(日)

1回目の資料整理をした後、重要と思われるポイントについて全方位写真を撮影しておいた。2回目は前回と異なる地域住民の方々に集まっていた。冒頭では1回目の取材内容(写真、エピソード、VR動画)を紹介した。この2回目の対話の中で、新たに出てきたエピソードを記録していった。

(3) 地域住民が所有する写真

西端地区在住のある方が、戦前からの写真資料を多く所有していると聞き、取材を行って、実に多くの貴重な写真(図9)とエピソードを入手した。これらの写真は、ただ、よく撮れているというだけでなく、撮影者がそこに暮らしていたリアリティがさらに写真を迫力のあるものにしている。このような事実は、他にも景観資源としての価値を物語る内容を持った写真が一般家庭のアルバムに多く存在している可能性があることを示している。そして、そうした写真の多くは誰にも気付かれることなくやがて消え去ってしまうのである。



図9 かつての西端地区目抜き通り(撮影:原田氏)

(4) 公開用パネルの制作

調査によって収集された写真とエピソードを、場所毎に整理し、パネル化した。一つの場所には、その場所に関する複数の視線、複数のエピソードが重なり合っている。また、紹介するエピソードは、なるべく話し言葉の調子をそのまま用いて、ニュアンスがうまく伝わるように配慮した。



図10 心に残る風景を集める西端展のパネルの1部

(5) パノラマビューワー「VOID」の制作

全方位写真は円環状にすると方位性を得る。人が中に入れる程度の大きさで制作すれば、VRと似た効果があると考えた。しかも、モニター画面よりもはるかに大きく、身体性を伴う画像は空間の3次元的な再現というより、被験者の空間的体験を思い起こさせるメディアになりえるのではないかと考えた。直径1200mm、長さ1800mmの紙管を直立させ写真を貼り付けるための構造材とし、人が入るようスリットを設けた。表3.の3の方法で作成した全方位写真（H600×W4200）を内側に貼り付けた。見慣れたはずの景色と思いがけない形で再開し、改めて自分たちの周囲について考えるきっかけを与える効果があると考えた。製作したのは2台で、西端地区旧集落の狭い「路地」と、エピソードが多かった「応仁寺の石段」付近の全方位写真を用いた。

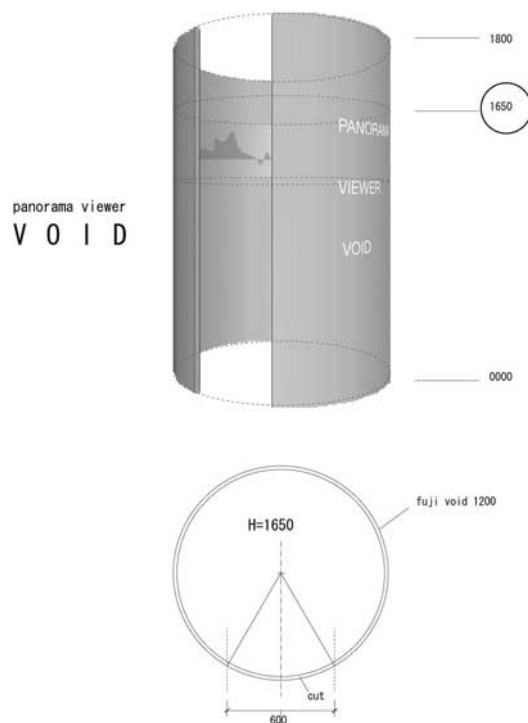


図11 VOID



図12 西端の路地



図13 応仁寺の石段

(6) 情報公開：心に残る風景を集める西端展

より多くの地域住民との対話を実現する為に平成18年3月18日～28日の10日間、西端農業者コミュニティセンターで、「心に残る風景を集める西端展」を開催し、これまで収集した景観資源を公開した。案内は公開に先立つ1ヶ月前にチラシを西端住民全戸に回覧板（図14）で行った。会期中に「心に残る風景を語る会」を開催し、展覧会で公開した資料をきっかけに、更なる情報収集ができることを期待したが、それほどエピソードが集まらず、反省すべき点が多くあった。西端で行った語る会は、1回目ということもあり、資料を用意しすぎ、研究者が一方的にレクチャーする場面が多かった。もっと地域住民同士が意見を言い合うような展開にできるよう工夫しなければならない。また、同じ内容を市役所のホールでも展示し、西端地区以外の市民は、西端地区をどう見ているのか、エピソードの収集方法の検討も兼ねて市民全体へのアピールを行った。（図15）



図14 西端展チラシ



図15 市役所ホールでの展示風景

4.2 棚尾地区

基本的には西端地区と同じ手法を使って取材および情報の公開を行った。ヒアリング（2回）→現地取材（2回）→パネル及びVOID制作→展覧会「心に残る景色を集める棚尾展」→会期中のイベント「心に残る景色を語る会」。会場は棚尾公民館を1週間借りた。パネル制作においては、従来通り、ヒアリングをもとにスタッフが撮影した写真で作成したAパネルを45枚、地域住民の方が撮影した写真をもとに構成するBパネルを4枚制作した。



図16 Aパネルの一部



図17 Bパネルの一部



図18 棚尾展のチラシ



図19 棚尾の心に残る風景を語る会



図20 毘沙門天のある商店街 (VOIDに用いた全方位写真)



図21 廃線になった鉄道軌道のある景色 (VOIDに用いた全方位写真)

5. まとめ

写真が景観行政、とりわけ景観資源の発掘と評価の過程においてどのような役割を果たしうるかについての仮説に対し、碧南市の2地区での実験の結果得た知見を次の表4にまとめた。

表4 写真の役割に関する仮説と実験結果から得た知見のまとめ

写真タイプ	視野タイプ	視線の構造	仮説	実験の結果及び効果
航空写真	直交座標系視野	非焦点的	1 環境を全く別の見方で見ることで好奇心を刺激する。自分の知っている場所を探してみたいようなゲーム性がある。記憶を呼び覚ます間接的なトリガーになるのではないか。	記憶と符合する場所を見つけるのは楽しい作業であり、参加者の集中力を高めた。航空写真は年代の違うものが用意できれば、変化の推移などが読み取れより一層効果的であった。また、白地図については、その情報量の少なさは、デメリットではなく、想像力を誘う余白として機能的した。
		2	自分や他人の経験が、同じ画面上に配置される。対話の中で共感や補完が促されるのではないか。	コメントが集中する場所と、そうでない場所の分布を見ることが出来、そのことが意味する内容について考えるきっかけを提供できた。また、エピソード共有の最小単位の一つとして「世帯」がある。「世帯」は情報の結束である一方境界壁でもある。航空写真上で「世帯」は並置され、比べられ、コメントされる。こうしてエピソードが世帯を超えて共有の輪を広げるきっかけを作る。
		3	個人の経験という主観的な事実と、地形や、家屋の密集具合や、緑地の分布状態といった、客観的な事実との関係性を見出しやすく、自分の経験に新しい説明が加わるのではないか。	研究者が微地形について話したところ、住民側から坂や切と通しに関する話題がたくさん出てきた。平坦な土地と言われ、そう思い込んでいたが、わずかな起伏が逆に平坦な土地で暮らす人にとっては大きな空間的特徴になっていたことがわかった。そうした場所の構造的特徴を理解するのに役立った。
		4	航空写真自体は特定の個人や考えを想起させるような誘導をしないので、対話の滑り出しに用いると効果的なのではないか。	航空写真があるだけで、住民は自由に記憶と写真の間で、意識の往復を始めた。前置きのない対話の最初に用いると効果的であった。展覧会でも、このパネルの前は足を止め数人で話し始めることが頻繁にあった。
スナップショット	極座標系視野	単焦点的	1 経験に最も近い視覚が得られるのではないか。	最初に調査で撮影したものはほとんど撮り直しをした。理由は、エピソードを明確に説明できる写真になっていなかったからである。スナップショットは経験に近い視野であるが故に構図やタイミングなどの絵作りの精度が要求される。一方、必ずしもエピソードを説明していなくてもわが町を美しく撮った写真は、好感を持たれるという副産物もあった。好感がもたれるということも、重要なトリガーになり得る。
		2	誰も自宅の古いアルバムには、整理されていない相当数の写真があるものだ。これらの中に景観資源を発見できる可能性があるのではないか。	戦前から碧南を撮ってこられたアマチュア写真家を訪ね、写真を見せていただいた。市史を編集した際の写真資料よりも生々しい地域の景観を知る良い資料となった。一般家庭にある古い写真にも、景観資源をリサーチする手がかりが残されている可能性があることがわかった。
		3	地域住民自ら撮影することが容易なのではないか。	昔の写真だけでなく、現在の景観に関して、地域住民が自ら撮影し対話の材料にしていくことが望ましいが、今回の実験ではそこまで及ばず、未実施である。
		4	スナップショットは撮影する人間の個性の違いが表面化しやすい。その「違い」が共感の対象になる場合もあれば、むしろ「違うわい」部分が手がかりになる可能性があるのではないか。	経験に近い視覚である分、絵図作りに厳密さが要求される。絵作りの完成度がある程度高まって初めて特定の感受性にヒットするという場合もあるが、幅広くエピソードを探りたい場合にはむしろ、中心がはっきり判らないぼんやりした写真のほうがいい場合もあった。
パノラマ・全方位写真	極座標系視野	多焦点的	1 かなり歪んで見える違和感のある視覚の中に見慣れたシーンを発見してゆく面白さがあり、間接的なトリガーになりうるのではないか。	横長に平面化した全方位写真は一般の方、特に高齢者には見にくいようであった。奇異な視覚性ゆえ足を止めるものの、それが何処なのか判るのに時間がかかった。しかし、VOIDは、見やすくアトラクション的な楽しさが重なり、参加意識を向上させる効果があった。自分の知っている場所がわかると驚きと、改めて別の視線で日常風景を眺める経験を提供出来た。
		2	ある景観の周辺にはどんな景観が広がっているのか、日常的な視野を広げる学習効果があるのではないか。	今回の実験ではこのことを確認できるほどの活用ができなかった。ある程度、住民の意見が絞られた段階で、この検証を行うと良いのではないかと思われる。
		3	臨場感の高いVR出力によって、地域住民の経験により接近した視覚を提供できる。より直接的なトリガーになりえるのではないか。	西端での2回目の調査の時に、1回目の報告を兼ねて、プロジェクターで投影しながらVR機能を用いたが、研究者が操作したため、一方的なレクチャースタイルになってきて、あまり効果的に使えなかった。住民が自由に写真を選び、操作できるインタラクティブな状況でないと効果が期待できない。インターネット上で公開する場合には期待してよいと思う。
		4	航空写真と同様に、志向性がなくニュートラルなので、複数の視点を持ち込める。ディスカッションしながら書き込みができれば、対話のプラットフォームとして有効ではないか	全方位写真の実験の中で、最も効果的であったのはVOIDであるが、これにはなかなか書き込みをしてもらえなかった。VOIDは、一見作品のように見え、抵抗感があったようだ。また、対話のプラットフォームとして全方位写真を使う場合には、超広角レンズで撮影している関係で、かなり大きく引き伸ばす必要があり、データも高精細でなければならない。多くの対話の機会を提供しているように見えながらも、今回の実験では仮説を確認できるような有効な利用方法の確立ができなかった。

6. 市民による情報の循環の必要性

最後に、今回の実験を通じて景観資源の発掘と評価のプロセスには、より日常的でかつ持続可能な地域住民の関与が必要であると感じた。特に、エピソードとスナップショットの取材はできうる限り地域住民が自ら行えるようなプログラムにすべきであること、取材で得られたデータを簡単な手続きで管理でき、常時閲覧、コメントの書き込みができるようなシステムを行政が準備すれば、地域住民で作業が完結するであろうということである。そうすることで、持続性が生まれ、作業自体が意識を高める教育効果を持ち、資料が充実するとともに、地域住民の景観意識が成熟してゆくのではないかと期待するからである。

今回の画像情報の役割を踏まえ、今後インターネットを利用した、市民による情報の循環が推進されるようなツールの開発に展開していきたい。

謝辞

本研究の一部は2006年度「日比科学技術振興財団研究開発助成」2006年度碧南市受諾研究によるものである。記して謝意を表する。また、本研究は碧南市の多大なる協力の下に実行することができた。研究の機会を与えてくださった愛知県の川上主幹、碧南市都市計画課の関係各位に深く感謝する。

参考文献

- 1) イーファー・トゥアン：トポフィリア：せりか書房、pp15-20,pp193-218, 1992
- 2) 安西信一：イギリス風景式庭園の美学：東京大学出版会、pp171-236, 2000
- 3) 風景と人間：アラン・コルバン：藤原書店、pp2-55, 2002
- 4) 碧南事典編さん会：碧南事典：碧南市、1993
- 5) 碧南市史編纂会：碧南市史：碧南市、1958
- 6) 樋口忠彦：景観の構造：技報堂出版、1975
- 7) 槇文彦、見えがくれする都市：鹿島出版会、1980